

高齢者の孤立をふせぐ

勸興は繁華街に隣接する地域で住宅地は少なく、住民も商店など自営業者が多い。核家族化の進行と共に団塊ジュニア世代が地域を離れ、人口が急激に高齢化が進行している。

【困りごと】①高齢者の健康不安。 ②独居高齢者の増加。 ③高齢者の全貌が見えにくい。

【対象・参加者】民生委員、調査に賛同する方 延115名

【内 容】地域課題を住民自らの手により洗い出し、改めてどこに問題があるのか、地域の人みんなで考え、解決に向けて取り組むきっかけづくりとする。(高齢者への聞き取り調査・結果からの意見出しワークショップ)

【講 師】大学准教授、社会教育・生涯学習研究者

高齢者の声を拾う

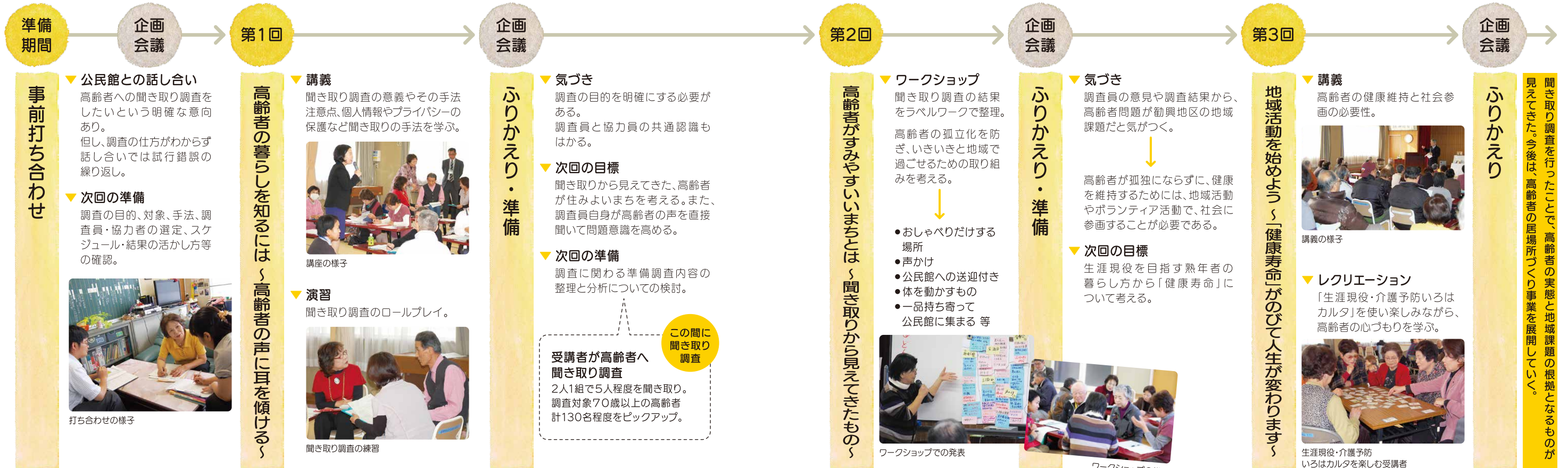
住民自らの手により
課題の洗い出し

みんなで
対策を考える



地域の特色

勸興校区は佐賀市の中心地に位置し、歴史と伝統が育まれたまちである。以前は中心商店街として賑わいを見せた時代もあった。現在は人口移動や経済地図が変化するにつれて、その姿も大きく変化してきたが、依然として佐賀市あるいは佐賀県の中心地としての機能はしっかりと保持している。人口は6,484人、3,412世帯で、校区内自治会は22町区。(R3.12.31現在)



ここが POINT!

- ①調査によって公民館で取り組むべき課題を発見。
- ②3者協働することで調査は可能になる。
- ③孤立化を防ぐには高齢者が健康で集い語る場が必要。

成果

- イメージだけだった高齢者像が
実態として顕在化
高齢者問題が地域課題だと裏付けができた。
- 公民館が地域を再認識
地域の支援に複数の団体や大学が入り乱れて
いたのを整理し、相互の協力・連携をはかった。

その後 展開

高齢者の居場所づくり事業

高齢者を対象にした居場所づくり。

福祉系の団体との連携

支援者が健康で活動できる仕組みづくり。

元気高齢者の地域活動参加のすすめ

心身の健康と自分自身で見出した役割が活力となるようにする。

STEP UP!

高齢者が集まる居場所を公民館に作る あつまれ！水曜

最初は公民館主導だったが、ただ呼びかけただけでは人が集まらなかった。そこで、老人クラブ、介護支援サポーター、民生委員、おたっしや本舗、西九州大学と連携し、高齢者の居場所づくり事業として、当番制で開催。ものづくりやニュースポーツから、防犯・交通の講話などバラエティに富んだメニューを展開。現在は、勸興まちづくり協議会のすこやか部会主催となり、継続中。



大学生が主催したコットンボールづくり
※高齢者を対象に毎月第1水曜日
10:00～16:00開催

結果的に

高齢者を孤立させない
事業が立ち上がった。

公民館応援団の育成

(地域活動をやってくれる住民の育成)

循誘では地域活動の参加や地域ボランティアも増加傾向にあるものの、特に市民性や主体性への意識が強いわけではない。これからは「地域で生きる」という意識を高め、住民が主体性を持ち、公民館活動にも積極的に参画する人材を育成したい。

【困りごと】自治活動を主体的にやってくれる人材が少ない。

【対象・参加者】YOU誘大学(高齢者学級)の受講者 延110名

【内 容】まちづくりの一步として、地域住民で「自分のため」「地域のため」にできることを考え、地域に関わることの大切さについて学び、当事者意識を芽生えさせる。

【講 師】大学教授

ボランティアの育成

公民館応援団を
作りたい

住民の
主体性を育む

佐賀市の中心部に位置する循誘校区。かつては佐嘉鍋島藩の城下町として栄え、江戸中期から明治中頃まで、佐賀で最も賑わいのある町だったと言われている。人口は8,725人、4,572世帯で、校区内自治会は20町区。(H4.2.28現在)

準備
期間

企画
会議

第1回

企画
会議

第2回

企画
会議

第3回

企画
会議

事前
打ち合わせ

▼ 公民館との話し合い
地域の良いところ、困りごと、住民の雰囲気等、地域の全体像の把握。公民館では、今まで講座の準備やふりかえりをする経験がなかった。
※公民館とアバンセ(当時は2者)での講座。企画の共有。



講師と関わったスタッフ一同

▼ 目標の設定
講座終了後、どう展開していくか。

YOU誘大学(高齢者学級)生から

ボランティアの育成

あなたの手が魔法の手に

▼ 講義
「あなたの手が魔法の手に」地域活動の楽しさ等の講話で、住民のやる気を引きだす。



講座の様子

▼ 宿題「魔法の手」
この講座で学んだことをエネルギーとして、いろんな人に手渡す。まずは家族に。



ふりかえり・準備

▼ 気づき
受講者に、この地域に生まれてよかった育ってよかった住んでよかったと「幸せ」を感じてもらうことが公民館職員の「幸せ」。

▼ 反省
公民館職員同士の考えの共有化をはかる。

▼ 次回の準備
受講者の反応、感想を公民館で把握。それ踏まえて第2回の内容を検討。

▼ 次回の目標
地域と受講者の接点を知り関心ごとはどこかを探る。

▼ 『しあわせ通信』の発行
講座のふりかえりとして『しあわせ通信』を作成。公民館職員の想いも掲載。



おしゃべりにお茶とお菓子は大事

ここが
POINT!

- ① ボランティアの育成は簡単ではない。
- ② 講座の事前の打ち合わせや講座の間のふりかえりが重要。
- ③ 公民館職員の講座に対する意識の変化。

成果

- 学ぶ大切さを知る
公民館に集い自分や地域で、できることをみんなで考え、学んだ。
- 居場所作り
住民が自由に意見を言え、つながる場を公民館が新しく作った。

その後
展開

お茶ご会

気軽にお茶を飲みながら「フェイスtoフェイス」の仕掛けづくり。

幸せをみつける10カ条

▼ 講義
第1回のふりかえりと生まれ変わったら男?女?



講座の様子

▼ ワークショップ
自分のやりたいこと、夢10個を書き出す。自分の可能性、社会とのつながり、一緒に実現する仲間を発見する。



ワークショップで上がった夢の一部

ふりかえり・準備

▼ 気づき
参加型ワークショップへの抵抗感。地域の人は公民館応援団を望んでいない?

公民館の応援団は公民館の課題で地域の課題ではなかったことに気がつく。

▼ 内容の再検討
みんなでやったら楽しい、それが人のため、社会のために役立つことを学ぶ。

▼ 次回の目標
「幸せをみつける10カ条」を元に、できることを考える。

みつけれましたか? あなたの幸せ

▼ ワークショップ
「自分のためにできること」「子どもたちのためにできること」「地域のためにできること」をグループで話す。
気持ちを行動に移すための一歩とは?

ひとつでもいいからやってみる。



ワークショップでの発表

ふりかえり

応援団は作れなかったけど、話し合いで新たな発見や広がりを感じた。地域や公民館活動について自由に言える場「お茶」会の開催決定。

STEP
UP!

お茶ご会の話し合いから 公民館カレーの日 が生まれる

最初に公民館の主導で「公民館カレーの日」のやり方を見せ、徐々に公民館を利用する団体やサークル等へと運営を移行した。カレーの日の売り上げ(1杯200円)から材料費を除いたあと、主催した団体等の活動資金として使用し、団体等のモチベーションを上げる仕組みづくりを形成。その結果、公民館職員が異動しても住民の主体性に支えられ、継続ができています。作り手と食べる側にも会話が發生。地域における「フェイスtoフェイス」の仕掛けづくりにもなった。



※毎月10日に各地域の12団体等が持ち回りでカレーを作り、地域の誰でもが参加できる昼食会を開催。2013(H25)年度から現在も継続。

結果的に
住民の
自主的な活動に
つながっていった。



課題

水害の常襲地域

防災意識を高め、自分たちでできる防災を考える

橘は水害の常襲地域で、毎年大雨のときには幹線道路が冠水し、町内の交通が部分的に不通となる。そこで住民の防災意識を向上させ、まずは自分や地域でできることを学び、行動につなげるきっかけとする。

【困りごと】①日常的な道路の冠水。 ②災害に対する住民の意識が低い。 ③高齢者世帯の増加。

【対象・参加者】区役員、民生委員、各種団体の方、及び関心のある方 延290名

【内 容】災害は身近なものだと知る。まち歩きをしながら避難通路の確認や地域の危険箇所がわかる防災マップを作成する。防災に対する共通認識を持つことで、将来的には自主防災組織体制の確立を目指す。

【講 師】河川事務所建設専門官、コーディネーター

目標

地域でできることを学び 行動につなげる



危険箇所を点検しながらのまち歩き

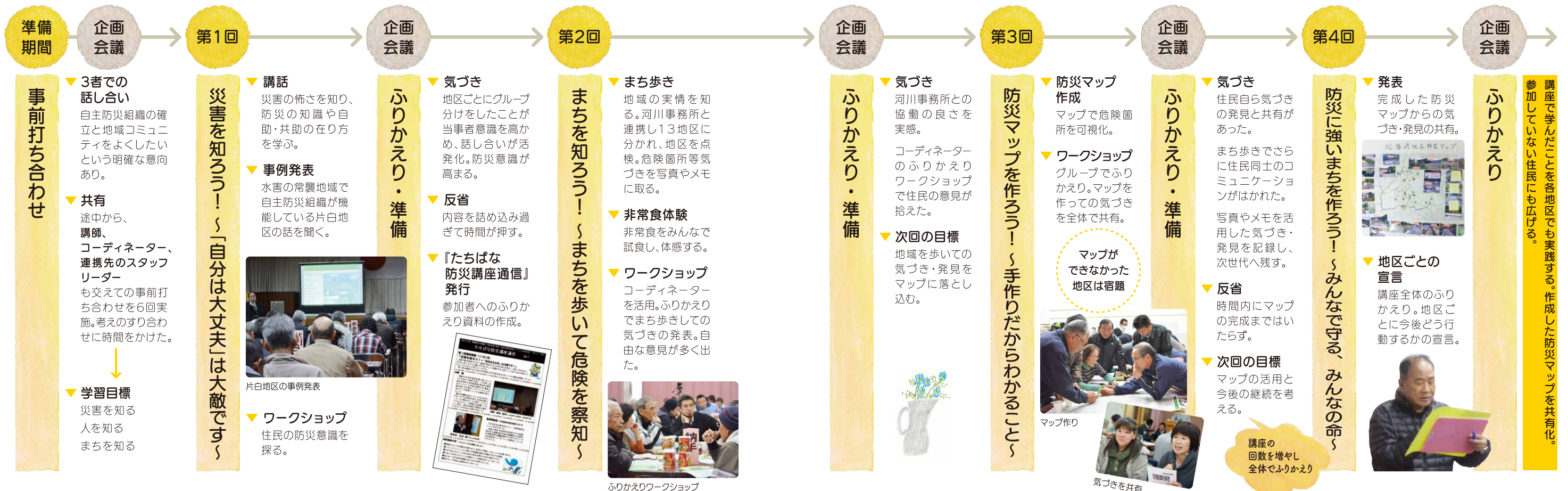
地域を知る

防災意識の
向上



地域の特色

橘町は武雄市の南部に位置し、六角川の上流潮見川流域を中心に、武雄市最大の水田が広がり、東西を低い山に囲まれた町である。農業を主産業として栄えてきたが、社会の変化と町の中央を横断する高速自動車の開通により、近代的な様相に変化してきた。近年整備が進み、農業の近代化がはかられている。人口は2,387人、835世帯で、町内自治会は13町区。(R4.2.28現在)



ここが
POINT!

- ①講座で地域や人を知り、住民自ら気づき・発見をする。
- ②地域課題を多くの住民で考えるとその場で共有ができる。
- ③国、県、市が協働で事業を実施。



初めての試みとして
カフェコーナー設置

成果

- 集って話し合う大切さを知る
地域のみんなが集まって話し合う、大切さを知ることができた。
- 意識の変化
住民も職員も、地域課題への取り組み方について意識変化がみられた。

その後
展開

防災の3年計画

県の助成金を利用し、防災講座の開催。市との連携で、防災訓練の実施。自主防災組織の確立。

STEP
UP!

計画の実施

県まなび課の助成金を利用して、防災講座を開催。防災マップを製本して、各戸配布。自治公民館にもA1サイズで配布し、掲示。市防災減災課と連携し、防災訓練の実施。各自治公民館から防災マップの避難経路を通して、再び自治公民館に集合。自主防災組織の確立。当初の3年計画に基づき、実践ができた。



その後も防災訓練が続いている

結果的に

防災講座の活動が認められ
文部科学大臣
優良公民館表彰に
輝いた。

自分たちで出来るまちづくり

基山でもさまざまな共同体が姿を消し、住民交流の場も減少している。また、地域活動への関心の低下は、今後の自治会運営が不安視される。そこで、住民が行政との協働のあり方を理解し、自らの意思で地域活動に取り組むことをめざす。

【困りごと】①共同体の減少による、住民の交流の場の減少。 ②自治会活動の高齢化。 ③中心街店舗の閉鎖。

【対象・参加者】第3区自治会(以下3区)の住民および関心のある基山町民 延70名

【内 容】まちなか公民館を使って、活動への一歩を踏み出すための仲間づくりを促し、住民主体のまちづくりに大切なこと、自分たちで出来るまちづくりのカタチについて考える機会を提供する。

【講 師】地域づくりコーディネーター

まちづくりを学び 活動する仲間を見つける

一緒に
語り合おう!

行動しよう!



基山町は17区の行政区に分かれている。その中心に位置している第3区自治会。JR基山駅周辺の地区として宅地開発も行われたが、地域を通る長崎街道には、今も昔の面影を感じさせる伝統的建築物が残っている。人口は1,404人、545世帯。(R4.2.28現在)



- ①まち歩きでまちの魅力や面白さを再発見。
- ②自分の関心事を物語にする。
- ③地域への愛着心が地域活性化へのきっかけを育む。

- 地域活動のやり方や人との関わり方を学べた
まち歩きを通して、みんなで学ぶ楽しさを体験。住民の意識が高まった。
- 新たな「集いの場」の発見
「まちなか公民館」の存在と駐在するスタッフとの出会い。



まち歩きに参加した受講者

町のまちづくり基金事業を活用し、防災訓練等の活動に取り組む

3区の自治会で防災学習に着手

2016(H28)～2017(H29)年度の2ヵ年、まちづくり基金事業を活用した取り組みを行った。講座に参加していた地域役員を中心に活動を展開。

職員相互のスキルアップ

基山町役場職員(まちづくり課担当職員)が、アバンセ職員や県内の社会教育・公民館職員と共に「学びを通じた地方創生コンファレンス」(文部科学省委託事業)に2016(H28)年度から2ヵ年参画。

やればできる!
という自信が芽生え活動を後押し
現在も第3区自治会での
防災研修は継続中。



コンファレンスメンバー

まちづくりを担ってきた世代の疲弊

中川副は、老人会やまちづくり協議会などの地縁活動等に協力的なまちである。しかし、地縁を支える住民は高齢化が進み、地域活動が活発であるがゆえに疲弊していくことが懸念される。

【困りごと】①老人クラブの加入者の減少。 ②地域活動を支えてきた住民の高齢化。 ③地域活動の後継者問題。

【対象・参加者】自治会役員、まちづくり協議会(以下まち協)、老人クラブ、中川副住民等 延142名

【内 容】地域活動を続けるための基本となる健康な暮らしを提案し、自発的な活動への意欲を高め、公民館を核として地域活動団体が連携する機会を提供する。

【講 師】大学教授(支援:健康体力づくり団体)

アクティブなシニアづくり

健康な暮らしについて学ぶ

まち協部会間の連携



地域の特色

中川副校区は筑後川流域の町。豊饒な佐賀平野では、農業と有明海苔の養殖が行われている。町の中心には、郷土の偉人「佐野常民」の教えを伝える佐野記念公園がある。記念公園には、明治日本の産業革命遺産の一つである三重津海軍所跡があり、世界文化遺産に登録されている。人口は2,899人、1,277世帯で、校区内自治会は16町区。(R4.2.28現在)



- ① 仲間と楽しい時間を過ごすことがまちづくりには大事。
- ② 健康がテーマだと関心が高く、活動に参加しやすい。
- ③ 健康と郷土愛(まちの歴史)を結びつけ、まちづくりを意識させる。

- 課題解決の手法が増える
健康をキーワードにした課題解決の手法のひとつを見つける。
- まち協の歴史・伝統部会と健康・福祉部会の連携
歴史とウォーキングを融合させることで連携がはかれた。

「元気で長生き大作戦! in 中川副」を合言葉に講座やウォーキングを継続する

「元気で長生き大作戦! in 中川副」を継続

2017(H29)年度も「元気で長生き大作戦! in 中川副」の講座を開催。その後、健康・福祉部会で万歩計をつけて「北海道まで行こう」と名付けてウォーキングを継続。歴史・伝統部会とのコラボも継続。

2021(R3)年3月に中川副まち協が「中川副歴史探訪ウォーキング」を発行。



2021(R3)年度森林公園をウォーキング

「元気で長生き大作戦! in 中川副」大成功!
現在も継続中

桜岡では、小・中学生の保護者を主な対象として、青少年の健全育成に関する研修会を年1回研修をしているが、本来参加してほしい保護者の参加が少ない。また、少子高齢化の中で住民のつながりが希薄化していることも課題。

【困りごと】①青少年を対象にした事業に子育て世代の参加が少ない。②地域での一体感がない。③地域に愛着心がない。

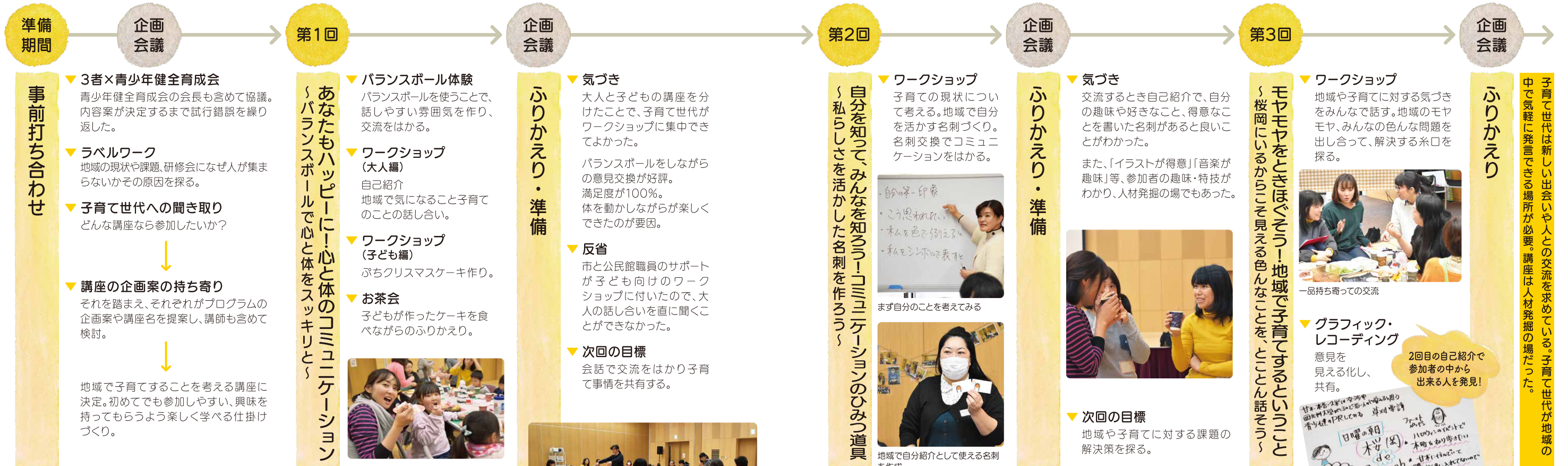
【対象・参加者】桜岡校区の小・中学生の保護者、桜岡地区青少年健全育成会役員及び関心のある方 延48名

【内容】地域住民同士のコミュニケーションを図るとともに、参加者の会話の中からニーズを引き出し、「これからの地域で子育てをすること」について考える。

【講師】大学准教授

地域の人との
交流

子育て世代の
ニーズの把握



ここが
POINT!

- ①子育て世代が地域で気軽に語り合う場が必要。
- ②講座は地域の人材発掘の場。
- ③子育て世代の参加を促すには、興味を引く仕掛けが必要。
(子どもの預かりも工夫)

成果

- 子育て世代が地域でできることを認識
子育て世代で地域に語り合いの場ができないか考えるきっかけとなる。
- 地域の人と交流することでつながりができる
自己紹介の名刺で特技や好きなことを知り、人がつながりやすくなる。

その後
展開

「Bar真理子」が誕生

地域交流の場。小城市内で毎月1回開催。

「桜岡de ブランチ」が誕生

日曜日の朝、親子でご飯を食べながら、地域で子育てをテーマに交流する。毎月1回開催。

STEP
UP!

Bar 真理子

※市民の出会いの場とまちの活性化を目指す異業種交流

噂を聞いて小城市外の人に参加することも。場所も小城市を飛び出し、市外で開催したこともある。2019(R元)年3月よりコロナ禍で一時休止。2020(R2)年11月に小城駅で再開したが、再びのコロナ禍で休止中。

ま・まんでいカフェ

※桜岡deランチから名前を変更

桜岡支館と桜岡青少年健全育成会の協力の元、毎回地域や子育てに関するテーマを出し意見を拾い、支館と育成会へフィードバック。その後リニューアルし、子どもに関わる全ての大人の居場所づくりの団体が引き継いで、現在も継続中。

結果的に

地域交流と
子育てを考える
場ができた。

桜岡青少年健全育成会も
子育て世代に周知できた。



2018(H30)年度 Bar真理子

子どもをサポートする ボランティアの育成

有田では「子育てする幸せ」を念頭に、子どもたちとともに学び楽しむ地域づくりを目指しており、子どもサポートの担い手となる人材の発掘に取り組もうとしている。しかし、まだ積極的に支援者になってくれる人材が少ない。

【困りごと】①放課後子ども教室の支援者がほしい。 ②人材発掘に苦慮している。ボランティアの育成は難しい。
③親子で遊べる場所がほとんどない。

【対象・参加者】子育てや地域活動に関心のある方 延60名、「わくわく子ども横丁」参加者183名

【内容】支援とはどのようなものかを学ぶ機会を作り、子どもを対象としたイベントを受講者で作りあげることで、支援のやりがいや楽しさを実践してもらう講座を実施する。

【講師】地域づくりアドバイザー



- ①企画づくりを学び、講座の中でイベントを実施。
- ②イベントの成功体験が受講者のモチベーションのアップ。
- ③大人と子どもの交流の扉を開いた。

- 意識変化 受講者に子ども支援に対するやりがいを感じてもらった。
- 親子で遊べる場の創出 年に一度ではあるが、公民館に親子が集まる場を作れた。

「わくわく子ども横丁」の継続
公民館はこの「わくわく子ども横丁」に手応えを感じ、次年度も継続していくこととなった。

「わくわく子ども横丁」

公民館は、2019(R元)年度に有田町生涯学習課と連携し「わくわく子ども横丁」を開催。前年度のプログラムをそのまま継続するのではなく、様々な団体と連携し新しく自分たちでできることにも取り組む。子ども支援者も若干ではあるが、増加しつつある。
※2020(R2)～2021(R3)年度はコロナ禍で中止。



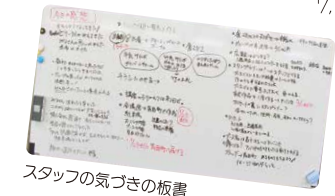
2019(R元)年度「わくわく子ども横丁」の様子

放課後
子ども支援
サポーターの
人材発掘に
つながった。

放課後子ども教室の サポーターの スキルアップ

支援の
あり方を学ぶ

わくわく
子ども横丁
の実現



有田町は、佐賀県の西部に位置し美しい景観を誇る田園地帯や黒髪連山など、豊かな自然に恵まれた温暖な気候の地域。有田焼の「器」と農業の「食」、両方の魅力を堪能できる町である。伝統と歴史、豊かな観光資源を生かしたまちづくりに取り組んでいる。面積は65.85km²で、人口は19,219人、7,783世帯で、自治会は49地区。(R4.2.28現在)

地域の魅力を再発見して、次世代へ継承

能古見を
もっと好きになる
大作戦

能古見は地域のほとんどが山林のため、近年、若い世代は生活の利便性が高い市の中心部に住む傾向があり、子どもの数も減少している。また、地域には多くの歴史的遺産や碑等が点在しているが風化しており、それらの保存や継承が危惧されている。

【困りごと】①地域の歴史や文化の伝承が廃れつつある。 ②次世代に能古見のことをもっと知ってほしい。
③公民館にもっと地域住民が集まってほしい。

【対象・参加者】能古見地区の住民延121名(内、能古見小学校の3年生29名)

【内容】地元住民一人ひとりが地域のことを「自分ごと」として捉え、みんなで集まって学び、交流を深めながら、地域のことやまちの宝を再発見・再認識する。また小学校と連携することによって、それらを子どもたちに伝承し、地域づくりに活かすきっかけとする。

【講師】市民図書館職員、生涯学習課職員、地区振興会役員、ドローン操縦者

地域のお宝再発見

次世代への
継承

公民館に
集い、学び、
交流促進



地域の特色

能古見地区は、中川水系・黒川水系(浅浦筋)・石木津川水系(山浦筋)の3つがあり、地域に豊かな美りをもたらしてきた。総面積は鹿島市の半ば近くを占め、その90%は山間部に属している。山間部には高齢者のみの世帯も多い。高齢化率約35%。また城址や寺社などの歴史も深く、面浮立や鉦浮立、獅子舞などの伝統文化も受け継がれている。人口は3,253人、1,140世帯で、6ブロック23区。(R4.1.31現在)



- ①ドローンやiPadを使い、地域の自然や歴史と結びつけ、興味を持たせる。
- ②歴史講座には人が多く集まるが、地域づくりに活かす仕組みづくりが必要。
- ③小学生の公民館体験は、どの地域でもすぐに取り入れることができる。

- 小学校との連携で次世代への継承のきっかけとなる新しい機器を使用し、地域の歴史やお宝に関心を持たせ、次世代へ継承。
- ドローンで撮影した映像が地域学習の教材へ地域学習の新しい手法となり、映像は地域のお宝になる。

「のごみ★お宝再発見プロジェクト」の継続

のごみ歴史巡りウォーキング

公民館は、課題解決支援講座からの継続事業として、2020(R2)年度に市生涯学習課と連携し、職員を講師に「のごみ歴史巡りウォーキング」を開催。

のごみ★お宝再発見プロジェクト

教育委員会は、2020(R2)年度に小学校と連携して小学3年生を対象とした「のごみ★お宝再発見プロジェクト」を開催。壁新聞を作成し、成果発表を行った。2021(R3)年度も継続。

「能古見をもっと好きになる大作戦」着々と進行中!



2020(R2)年度「のごみ★お宝再発見プロジェクト」

地域のつながりをつくり 住民の参画を促す

鳥栖地区まちづくり推進協議会(以下まち協)は、事業に対する前向きな意欲はあるが、盛りだくさんの事業をしていたため、事業の点検・精査が十分にできず、マンネリ化や疲弊感が募っている。そこで、まち協同士のコミュニケーションを再構築し、住民に活動を知ってもらい、地域活動に参画する機会をはかる。

【困りごと】①地区全体が一体となって取り組む機会がほとんどない。②まち協の活動のマンネリ化。

【対象・参加者】まち協、鳥栖地区地域住民 延204名

【内容】地区全体の住民ができるイベントをまちづくり推進センター(以下センター)とまち協が主体となって再考し、新しい枠組みをつくる講座を実施する。(※センターはまち協の事務局を兼ねている)

【講師】地域デザイナー

自走できるまちづくり

まち協の
再創造

センターの
地域交流の
拠点化



地域の特徴

鳥栖地区は鳥栖市の南東部に位置し、駅前の商業地や歴史的な長崎街道、工業団地、田園風景などが共存し、流通の拠点として、古くからの住民はもちろんで、県内外からの転入者や外国人も多く、人も町も多様性に富んだ地域である。高齢化、人口減少の課題がない町。人口は約11,950人、5,465世帯で、校区内自治会は14町区。(R3.12.31現在)



ここが
POINT!

- ①意見が言いやすい場の創出で、まち協が変化。
- ②企画の立て方や運営の仕方等の学びの機会となる。
- ③センターに人が集まるきっかけとなる。

成果

- まち協の再創造のきっかけができた
企画からのイベント成功体験がまち協のやる気につながり、意識が変化。
- 連携により地域活動での協力体制が生まれた
連携することで出来ることの幅が広がった。

その後
展開

「とすまちもちまつり」
の継続
手応えを感じ、次年度も継続して
いくこととなった。

STEP
UP!

まち協の話し合いの場
が劇的に変化

それまでほとんど意見が出ない状態だったが、活発化し誰でも意見が言える場となった。また、各団体や事務局とまち協のつながりも前進した。



まち協の会議の様子



もちまつりのボランティアスタッフ
この他にも消防団、おやじの会等が協力

「とすまちもちまつり」2020(R2)～2021(R3)年度は
コロナ禍で中止。

地域の未来が心配

大人や子どもの本音が知りたい

大良の住民は、協力的で何事も引き受けて取り組む人が多い一方、本音を言えているのか不安。将来的に小学校の統廃合が見込まれる中、今は元気だが、地域の未来について、住民同士が本音で話し合い、考えることが必要である。

【困りごと】①地域の将来的な人口減少、過疎化への不安。(小学校統廃合) ②一部の住民の声しか聞けていない。
③住民間で年代、家族環境等による考え方や意識の違いがある。

【対象・参加者】大良地区に在住の方(公民館運営審議委員、育友会、子ども教室サポーター等) 延120名

【内容】住民が参画しながら意識調査を行い、地域の実態やニーズを顕在化させ、住民全体が共通認識を持つことで、これからの大良の在り方や未来像を考える機会となる講座を実施する。住民へのアンケート調査、小学校とも連携。

【講師】社会教育・公民館勤務経験を持つ市職員

住民の本音が言える場づくり

アクションにつなげる

地域の未来ビジョンを作成



地域の特色

大良地区は、唐津市の西方上場台地に位置し、山に囲まれた自然豊かな土地で、ハウス栽培や畜産業など、農業を基幹産業とする農村地帯。約8割の世帯が農業(兼業含む)に従事。地区全体の人口は減少傾向にあり、2012(H24)年度末に大良中学校が閉校となった。公民館に隣接して、保育園と小学校がある。人口は約600人、世帯数は147世帯。7地区。(R3.3.31現在)

